

【第3日】令和2年2月2日（日）

1) 足袋生産で全国の8割を占めていた行田、足袋蔵を活用した町おこし視察

「NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク活動概要」

行田の名産品といえば、和装文化の足元を支え続ける「足袋」です。またその足袋を保管する倉庫である「足袋蔵」は江戸時代後期ごろから昭和30年代前半までの間に建てられたものが多く、市内の約80棟の土蔵、石蔵、レンガ蔵などの多種多様な足袋蔵が現存し、行田のまちの趣のある景観が寄与しています。

平成29年4月には、「足袋蔵のまち行田」が埼玉県内初の日本遺産に認定され、その魅力に注目が集まっているところです。

「特定非営利活動法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク」は行田市内に点在している足袋蔵などの歴史的建造物の有効活動を図り、いきいきしたまちづくりを目指すために、平成16年6月に設立されました。

主に「足袋とくらしの博物館」（旧牧野本店の足袋工場及び土蔵）や「足袋蔵まちづくりミュージアム」（栗代蔵を改装）を運営し、足袋づくりや足袋蔵の歴史や魅力を紹介しています。

また牧舎（母屋及び工房）とその一部藍染体験工房「牧舎」の運営などを行い、年間約8千500名をこえる方がこの博物館などを利用しています。

「特定非営利活動法人忠次郎蔵」は、旧小川忠次郎商店の店舗及び主屋である「忠次郎蔵を」手打ちそばの店として活用し、運営を行っています。「忠次郎蔵」は国の登録有形文化財にも指定されています。

市民に身近に感じてもらい、親しまれる施設としたいという考えのもと、平成16年から手打ちそばの店として活用され、年間6,800人を超える方が訪れています。

2) 日本遺産の認定

行田市が文化庁に申請していたストーリーが平成29年4月28日に県内初の日本遺産に認定されています。

日本遺産は地域の歴史的の魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するもので、ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

世界遺産登録や文化財指定は、いずれも登録・指定される文化財（文化遺産）の価値付けを行い、保護を担保することを目的とするものです。一方で日本遺産は、既存の文化財の価値付けや保全のための新たな規制を図ることを目的と

したものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている点に違いがあります。

文化庁では、令和2年までに全国で100件のストーリーを日本遺産に認定する予定で、文化財を活用したまちづくり、観光振興、地域活性化が期待されています。

5 【まとめ】

本市においても、旧引田町時代に引田まち並み保存会が発足し、引田の古い町並みを保存する住民運動により旧井筒屋を行政が買い取り、合併後、讃州井筒屋敷として本市の観光拠点としてスタートしました。発足時には全国から注目され行政視察や来訪者が増えていましたが、現在は、町並み自体が徐々に風化しているのが現状です。また、町並み保存会も全国町並み保存連盟に加入するチャンスがありましたが、会員の温度差により入会せずその後解散しています。そこで、本市にとっても観光資源として重要な引田の古い町並みをなんとか保存できないかと言うことで、「風の港まちづくりネットワーク」が発足し、昨年、全国町並み保存連盟に入会して、全国の町並み保存の事例などをアドバイスいただきながら解決策を模索しています。全国大会では、毎回本市の観光や産業などを大会会場で紹介プレゼンテーションしています。今回の会議において3月20日21日に全国町並み保存連盟理事会を引田で開催していただけることになりました。

私は、東かがわ市引田地区の古い町並みを後世に残すためには、文化庁とも精通する全国町並み保存連盟と連携し、全国の町並み保存に関心のある方と交流することが重要だと感じています。